

1923年におけるルイジアナ州 バトンルーージュの都市構造

中 川 正

- I. はじめに
- II. 研究方法
- III. 景観要素と諸機能の分布
- IV. 都市構造と人種的セグリゲーション
- V. 結 び

I. はじめに

本稿は、合衆国ルイジアナ州バトンルーージュにおける1923年の都市構造を、歴史地図に表現された土地利用の分析を通して復元するものであるが、まずその意義を明らかにしておきたい。

バージェスが都市の内部構造を模式化した同心円理論を発表したのは1925年のことであったが、彼はこのモデルを説明する際に中西部の大都市シカゴの土地利用を事例として用いた¹⁾。このモデルによると、都市は同心円を描く5つの地帯からなり、内側からループ(CBD)、遷移地帯、労働者住宅地帯、住宅地帯、通勤者地帯とつづく構造をなしている。そして、この5つの同心円パターンの例外的要素として、黒人地帯が遷移地帯から労働者住宅地帯に帯状に延びる形状で示されていた。

このモデルにおける黒人地帯は、黒人人口が4%に満たないシカゴの状況を比較的適切に表現したものであったが、あくまで黒人は都市において少数派であるという前提のもとに、人種的要素を副次的に扱っていた。さらに、このモデルに対する批判や支持も、デーヴィ²⁾、クイン³⁾、ホイト⁴⁾達によって1920年代や1930年代における他の合衆国の都市の観察に基づいて行われてきたが、人種的要因に関する検討は十分

とはいえず、その観点に立つ研究の隆盛は、計量革命以降の因子生態研究⁵⁾を待たなければならなかった。

しかし、都市の内部構造に与える人種的影響は近年に始まったものではなく、合衆国南部の都市においては、とくに奴隷解放以後に少なからず現われ続けてきた。黒人人口比率が高い南部では、黒人は単に都市構造の副次的要素としては扱えない一面を持っているように思われる。本稿では、その南部の都市の一事例として、バトンルーージュをとりあげ、同心円理論が提示された1920年代における都市構造を復元し、人種的すみわけをも検討することによって、人種的観点を含めた過去の都市比較研究の端緒とするものである。バトンルーージュは、ミシシッピ川左岸に位置するルイジアナ州の州都であり、政治機能ばかりでなく、商業機能、教育機能、工業機能をもあわせ持った南部の重要な都市の一つであった。1920年における人口は21,782、そのうち8,560人(39.3%)は黒人であった。

II. 研究方法

バトンルーージュのような合衆国の都市の過去の構造を詳細に復元するためには、どのようなデータが利用できるものであろうか？ 住居のブロックごとのデータは、1940年以降国勢調査の一環として出版されているが、それ以前のデータは存在しない。センサストラクトの調査単位も、バトンルーージュの分析には大きすぎる。

ここで最も有効な資料は、サンボーン地図会社(Sanborn Map Company)による、合衆国の実質上すべての市街化地域の建築物現況図で

あろう⁶⁾。サンボーン地図は1インチ：50フィート（1：600）または1インチ：100フィート（1：1,200）の縮尺で印刷されている。地図には街路、ブロック、宅地区画、建築物、鉄道路線などの文化景観要素が記され、建築物の材質、建築物の用途、高さ、形などが詳細に表わされている。サンボーン会社は、合衆国全体にわたってサービスを提供しており、数年ごとにそれぞれの都市の地図の改訂を行っている。

サンボーン地図は、ほとんどすべての都市の市役所、裁判所、図書館、保険会社で閲覧することが可能である。筆者は、バトンルージュのルイジアナ州立大学地図図書館で、19世紀後半から1923年までの数年次のバトンルージュの市街図のうち、1923年のものを閲覧し、それを分析に用いた。

本稿では、バトンルージュの都市構造を、サンボーン地図から抽出することのできる都市景観の諸要素と都市機能施設を地図上におとし、一定の基準を用いてブロックを分類することによって導き出す。景観要素としては、2階建て以上の建築物、木造以外の（煉瓦・石・コンクリート造）建築物、そして建築物の面積を、高

地地域域の指標として選択し、それぞれの分布を考察した。諸機能施設としては、商業施設、工業施設、公共施設を選択した。そして、これらの要素の分布から都市構造を確定し、既存の理論をもとに検討する。そのうえで、人種的セグレーションの実態を黒人と白人の学校や教会の分布から把握し、それと都市構造との関係を考察する。

III. 景観要素と諸機能の分布

バトンルージュは、ミシシッピ川左岸の洪積台地上に立地する都市である。都市は、おおよそ格子状の街路パターンを示しているが、この基本的形態は19世紀初期におけるスペイン支配下に形成され、その後徐々に広がっていったものとされている。

川と垂直にバトンルージュ港からメインストリートが延びており、その南に平行に走るローレルストリートやフロリダストリートとともに、東西に走る重要な街路となっている。ミシシッピ川に平行に走る道は、川に近い所からナッチェス、ラフィエット、サード、チャーチストリートと続くが、1923年当時にはサードストリー

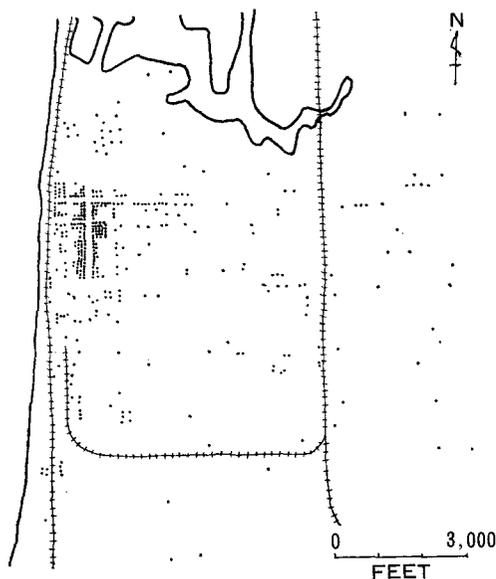


図1 石・コンクリート・煉瓦造りの建築物の分布

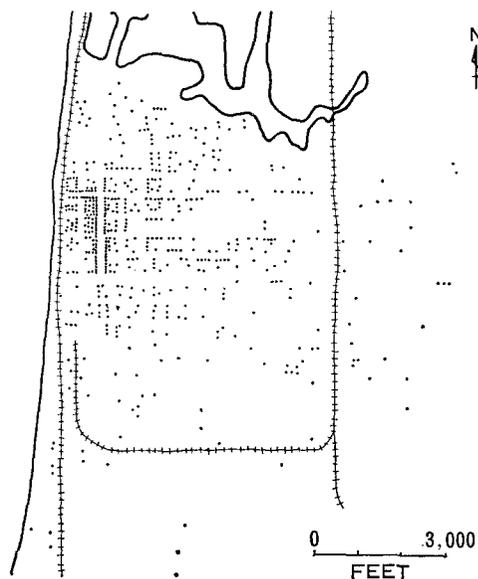


図2 2階建て以上の建築物の分布

トが最もにぎやかな商店街であった。バトンルー
ージュには、2つの鉄道会社による3つの鉄
道が走っているが、ミシシッピ川沿いに走るヤ
ズーアンドミシシッピバレー鉄道は1884年に、そ
して他の2つの路線を有するルイジアナレイル
ウェーアンドナビゲーション会社は1903年にバ
トンルーージュで営業を開始した。

バトンルーージュの大多数の建築物は、他の南
部の諸地域と同様、木造である。石・コンクリ
ート・煉瓦造りの建物は、商業中心地であるサ
ードストリートや、メインストリートに集中し
ている(図1)。これらの大多数は、商店であ
る。また、北部にみられるまばらな分布は、ル
イジアナ州立大学の校舎である。川沿いには煉
瓦造りの工業施設が建ち並んでいる。また中心
地区に近い高級住宅にも、煉瓦や石造りのもの
がいくつか見られる。

2階建て以上の建物も同様な分布を示してい
る(図2)。しかし、石・コンクリート・煉瓦
造りの建物の分布と比較して、サードストリ
ートに集中する割合が低く、それに垂直に走る

くつかの道路上に、より広範な広がりを見せて
いる。2階建て以上の建物は、一般住宅にもし
ばしば現われるために、必ずしも中心業務地区
や文教地区、工業地区に限られることはない。

サンボーン地図から抽出できるもう一つの重
要な景観要素として、建築物の面積があろう。
この景観要素は高地代住宅地域と低地代住宅地
域を区別するうえで、有効な指標の一つになる
ものと考えられる。建築物の面積を地図上に表
現する際に、いろいろな方法が可能であるが、
ここでは経験的に、かつ便宜的にすべての建築
物の1階部分の面積を、4,000平方フィート(約
370平方メートル)以上か未満かに分類し、1
ブロック内における4,000平方フィート以上の
建物数の割合をブロックごとに示した(図3)。

バトンルーージュの中心業務地区とその周囲に、
比較的広い範囲にわたって4,000平方フィート
以上の建物率60%以上の地域が広がっており、
30%以上60%未満の地域を含めると、鉄道路線
に囲まれた地域のほぼ全域をおおっている。こ
れらの景観要素の分布を要約すると、バトンル

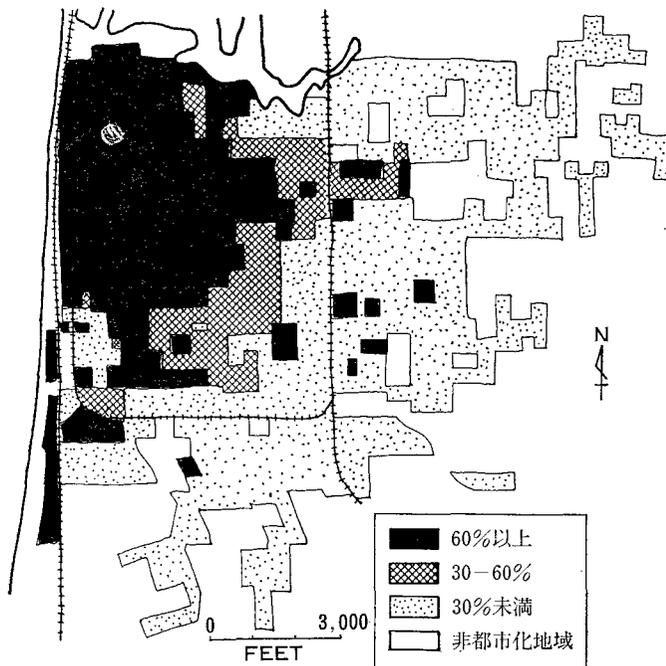


図3 1ブロック内における4,000平方フィート以上の建物数の割合

ージュでは、ダウンタウンとその周辺に石・コンクリート・煉瓦造りや2階建て以上の大きな建築物がしばしば見られるのに対して、市の周辺地域に木造平屋建ての小さな建築物が多く見られるということになる。

以上の景観要素以外にも、都市諸機能の分布も都市構造を示す重要な手がかりとなる。まず、卸売り・小売り業施設の分布は、中心商店街であるサードストリートとそれに準ずるメインストリートに大きな集中を見せる(図4)。この両ストリートの商店は一般的に敷地が大きく、石・コンクリート・煉瓦造りの2階建て建築である。これに続く商店集中地域は、市の東部を走る鉄道に垂直に走るノースブルバードとガバメントストリート沿いである。これらの商店は、小さな木造平屋建てで、主に最寄り品を販売する小売店であり、買い回り品の販売も行いうサードストリートやメインストリート沿いの店舗とは規模や商圏が異なる。その他にも全市街地域にわたって、そ

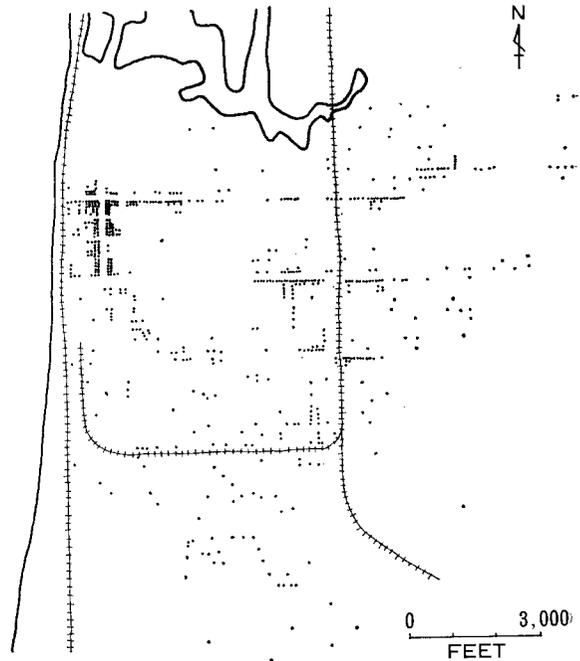


図4 卸売り・小売り業施設の分布

れぞれのコミュニティに最寄り品を提供する小売店がまばらに分布している。

これに対して、バトンルージュの工業施設は

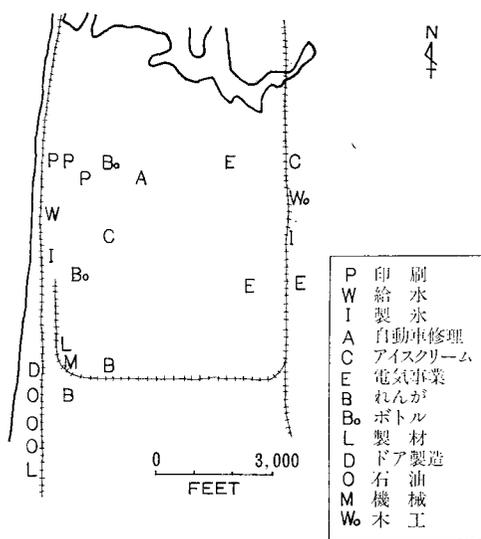


図5 工業施設の分布

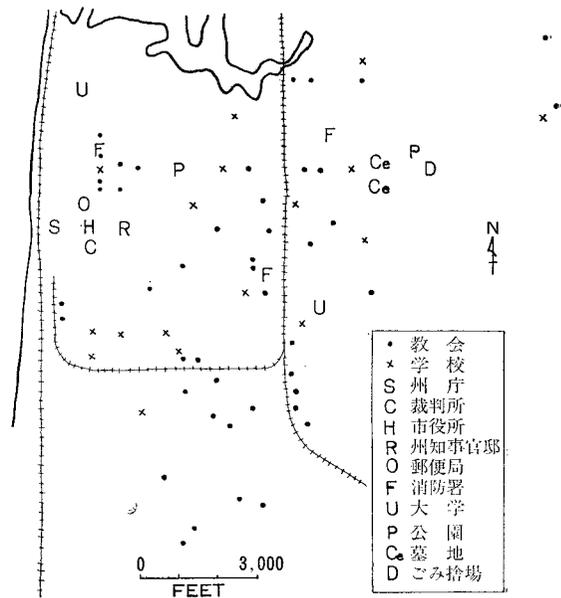


図6 公共施設の分布

鉄道沿いに分布している（図5）。石油、製材、煉瓦造り工業施設は、比較的広大な敷地が得やすい市の南部の河川沿いに立地している。この地区への立地には、河川を利用した原料や生産物の流通が行いやすいという要因も働いているであろう。一方、印刷工場はダウンタウンに立地しているが、これは顧客である新聞社に近いためと考えられる。

公共施設や準公共施設は、その種類によって異なった分布を示す（図6）。教会、学校、消防署は、主にその周囲のコミュニティにサービスを提供するために、比較的全市にわたって広く分布している。これに対して、州庁（state capitol）、裁判所、市役所、州知事官邸、中央郵便局など、高次の公共サービスを提供する施設はダウンタウンに立地している。一方、墓地とごみ投棄所は、メインストリート沿いではあるが、市の最も外延に設置されている。

IV. 都市構造と人種的セグリゲーション

以上の分布を基本的なデータとして、次の手順でバトンルージュの都市構造を導出する。まず、それぞれのブロックにおいて、住宅面積がすべての建物の面積の半分以上を占める場合に、そのブロックを住宅地区とし、それ以外の場合に非住宅地区とする。

高地代住宅地区を低地代住宅地区から区別する指標としては、非木造建築物、2階建て建築物、大規模建築物の分布などが考えられるが、ここでは図3において明確な分布パターンが確認された大規模建築物のブロック別割合を用いた。すなわち、図3において、4,000平方フィート以上の建築物がブロックの全建築面積の30%を占めるか否かという指標がバトンルージュを明瞭に二分しているために、それを高地代住宅地区と低地代住宅地区に区分する指標として経験的に選定した。また、非住宅地区は、それぞれのブロックにおいて面積的に卓越する機能に

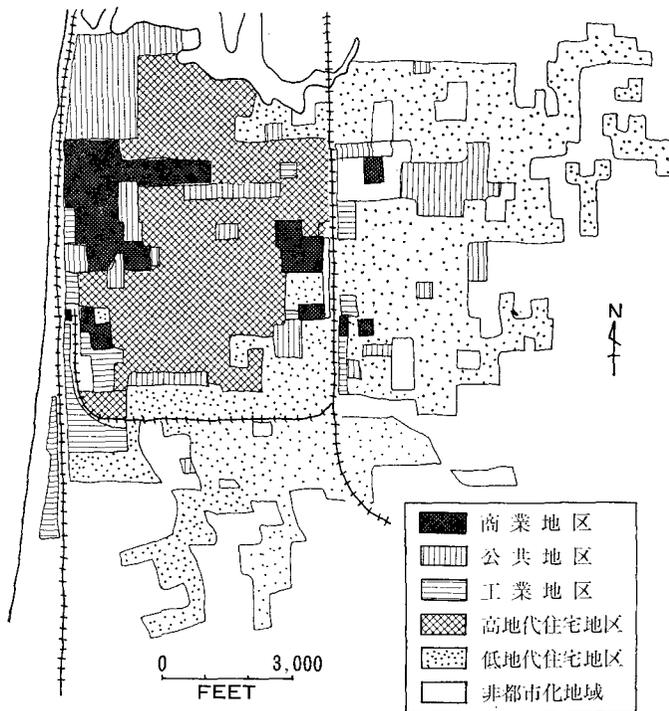


図7 1923年におけるバトンルージュの都市構造

基づいて、商業、公共、工業地区に分類した。

その結果、バトンルージュの都市内部構造が明瞭に表現された(図7)。商業地区は、ダウンタウンのサードストリートとメインストリートに最大の広がりを持つ。この地区は、2階建ての石・コンクリート・煉瓦造りの、比較的大きな小売り、卸売り施設が集中する中心商業地区として位置付けられよう。これに次ぐ商業地区の広がりには、東部の鉄道沿いに見られるが、中心商業地区とは異なり、規模の小さな木造平屋建ての小売り業施設によって構成されている。

公共地区は、ほぼ中心商業地区を囲むように広がっている。州庁、市役所、裁判所などの高次の公共施設は中心商業地区の南に連なり、商業地区と共にCBDを形成し、また北部にはルイジアナ州立大学がある。この一連の広がり以外には、比較的広く散在している小・中学校がある。また、メインストリート沿いの市の東端に近い地域は、市営墓地として公共地区を形成している。

工業地区の最大の広がりには、ミシシッピ川沿いの市の南部にある。これは、工業が広い土地と水上交通や鉄道交通の連結点に立地しやすいためと考えられる。その他にも、鉄道沿いに小さな工業地区の飛び地が存在する。

住宅地区は、商業・公共・工業地区を取り囲む形態で大きく広がっているが、CBDを囲んで同心円状に、高地代住宅地区が内側に、低地代住宅地区が外側に位置する基本的形態を示している。この高地代住宅地区では、建物の1階部分の面積が大きいばかりでなく、その建物の多くが2階建てであり、また石・コンクリート・煉瓦造りである。一方、低地代住宅地区には、木造平屋建ての小さな住宅が多い。

このように、バトンルージュの都市構造は、部分的に商業地区、工業地区、公共施設の独自なまとまりを持っているが、基本的にはCBDを核とした同心円構造を示している。しかし、ここで注目すべきは、バトンルージュの同心円構造が、バージェスの理論とは逆に、高地代住宅地区が内側に、低地代住宅地区が外側に位置

する形態をとっていることである。もちろんシカゴとバトンルージュは、まったく規模の異なる都市であるが、この逆転構造は、人口という数量的な差異の反映というよりは、やはり北部都市と南部都市の性格的差異を示しているように思われる。人種的なセグレーションという要因を考慮することなしに、バトンルージュの都市構造を説明することは困難であろう。

サンボーン地図から人種のすみわけを発見するための最も有力な手がかりは、白人と黒人の学校や教会の分布であろう。当時のバトンルージュにおけるすべての学校や教会は人種によって区別されており、それが地図上に記されている。南部における人種分離の慣行のために、黒人のパブリックスクールの位置は、ほぼ黒人居住地区に対応している。また、バトンルージュの黒人の大多数はバプテストやメソジストを中心とするプロテスタントであり、コミュニティ単位で教会を設置するために、黒人教会の場所から、黒人コミュニティの場所を類推することが可能である。

白人・黒人の学校や教会の分布を実際に示してみると、白人施設の分布と高地代住宅地区、そして黒人施設の分布と低地代住宅地区が対応していることが明瞭である(図8)。このことから、中心部に裕福な白人が住み、周辺部に貧しい黒人が住む、バトンルージュの人種的セグレーションのパターンが明らかである。また同時に、東部の鉄道沿いに見られた規模の小さな小売店の集中している商業地区が、主に黒人を顧客としていることも類推される。

この人種的空間構造には、バトンルージュにおける歴史的要因が作用しているものと考えられる。ルイジアナにおける中心都市であるバトンルージュには、南北戦争以前から少なからぬ黒人人口があったが、その大多数は奴隷であった。たとえば、1860年には、市人口5,428の32%が黒人であり、その72%に相当する1,247人が奴隷であった。バトンルージュは、基本的には白人用の都市として計画され、奴隷は所有者である白人に隷属する形でプランテーションに

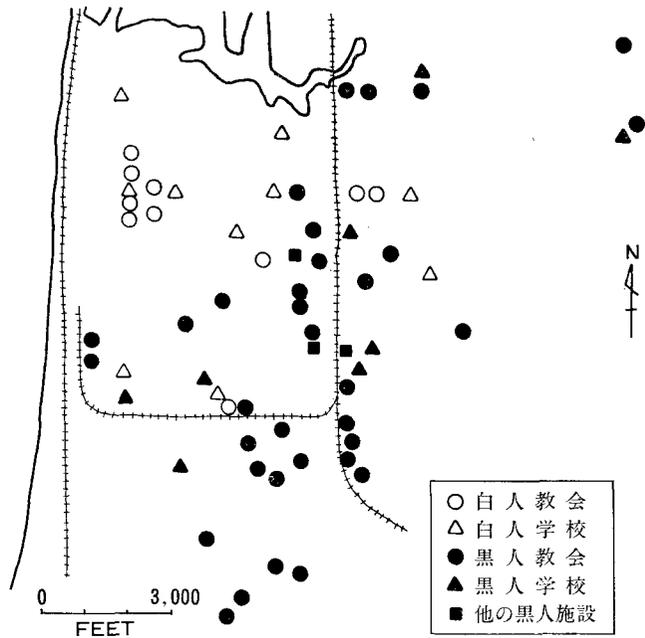


図8 白人・黒人施設の分布

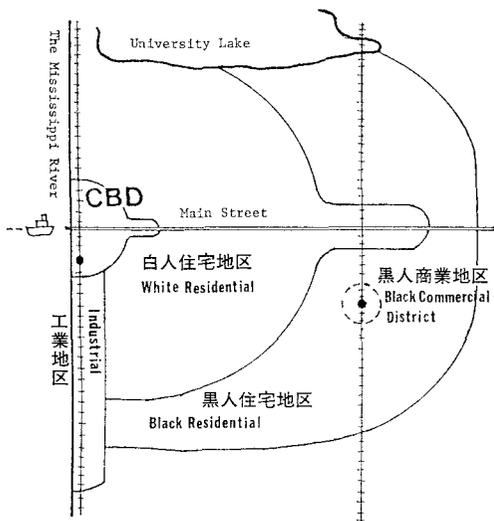


図9 バトンルージュの都市構造モデル

用の学校や教会が生まれ、また黒人を対象とした商業地区も形成されたものと推定される。

以上の考察から、バトンルージュの1923年の都市構造は、バージェスのように高地代住宅地区・低地代住宅地区という経済的観点から把握するよりも、白人住宅地区と黒人住宅地区のモザイクという人種的要因によって形成されていると見るほうが、より適切であると考えられる(図9)。1923年のバトンルージュは、ミシシッピ川沿いの工業地区を除けば、基本的にはCBDを白人住宅地区が囲み、市の周辺部に黒人住宅地区が広がる同心円構造を示していた。黒人地区内には、黒人用の商業中心地が存在し、CBDとは別の独自の核心地を有していた。

V. 結び

集中して、あるいは都市に散在して居住していた。黒人解放後、市の中心部にはすでに白人の居住地区が存在していたために、解放された黒人たちは市の周辺部に、小さな木造建ての平屋住宅を建てて住んだ。黒人居住地区には、黒人

本研究では、1923年におけるバトンルージュの都市構造に、人種的な要因が強く反映していることが確認されたが、1920年代から1940年前後にかけて発表された同心円理論に対する批判に、人種的な観点が希薄であったことは注目さ

れよう。南部をも含む合衆国の142都市の地代分布を検討したホイットさえも、人種的な要因に対する考察は少なかつた⁷⁾。

このことは、合衆国の白人の地理学者たちにとって、白人がいかなる場所でもマジョリティであるはずだという、暗黙の思い込みがあったからではないかと推察される。人種や民族をも主要な分析対象とする研究は、1940年代から現われてくるが、隆盛を見るのは公民権運動が活発となった1960年代からであったことを考えると、人種・民族という要素がマジョリティの意識にのぼるか否かは、ある程度時代的な風潮に関連しているように思われる。しかし、人種的な観点をも含めて、合衆国における過去の都市構造を検討しなおすことは、サンボーン地図という網羅的なデータが存在しているために十分に可能であり、そのことが、今後の歴史地理学研究の課題のひとつとなる。

しかし、本研究は同心円理論を否定する性格のものではないことを、付け加えておく必要がある。同心円理論は、基本的に都市の諸機能と住民の経済状況から、都市内部構造を動態的に説明したモデルであり、同じ前提のもとでは、普遍性を持って説明力を有する。バトンルージュにおいてさえも、とくに1960年代以降、白人を中心とする高所得者層が郊外に移り住む傾向が強くなり、現在では低所得者層が内部に、高所得者層が周辺に住む形態を示している。本研究は、歴史的にバトンルージュという南部の都市の内部構造の変化を見る際に、人種的な見

地が不可欠であること、そしてその観点が過去の研究においても可能であったことを示すものとして意義づけられよう。

(筑波大学地球科学系)

〔注〕

- 1) Burgess, E. W. : 'The Growth of the City' (Park, R. E., Burgess, E.W., and McKenzie, R. D.) : *The City*, Univ. of Chicago Press, 1925, pp. 47-62.
- 2) Davie, M. R. : 'The Pattern of Urban Growth' (Murdock, G. P.) : *Studies in the Science of Society*, Yale Univ. Press, 1937, pp. 133-161.
- 3) Quinn, J. A. : 'The Burgess Zonal Hypothesis and Its Critics' *American Sociological Review*, 5, 1940, pp. 210-218.
- 4) Hoyt, H. : *The Structure and Growth of Residential Neighborhoods in American Cities*, Federal Housing Administration, 1939.
- 5) たとえば, Simmons, J. W. : 'Descriptive Models of Urban Land Use' *Canadian Geographer*, 9, 1965, pp. 170-174.
日本人による研究としては、樋口忠成「デトロイト大都市地域の居住分化とその空間パターン—因子生態研究からみた1960年と1970年の比較—」*人文地理*, 31-1, 1979, pp. 5-27.
- 6) Applebaum, W. : 'A Technique for Constructing a Population and Urban Land-use Map' *Economic Geography*, 28, 1952, p. 240.
- 7) 前掲4)

THE URBAN STRUCTURE OF BATON ROUGE,
LOUISIANA, U. S. A., 1923

Tadashi NAKAGAWA

It was in the 1920s when Burgess constructed the concentric zone model through the observation of Chicago, a gigantic Northern city. However, this model overlooked the importance of racial elements in the urban landscape in Southern cities. This study reconstructs the urban structure in 1923 of Baton Rouge, Louisiana, as a case of Southern cities to examine the racial factors in the 1920s. The data of this research come from the 1923 Sanborn Insurance Company Map of Baton Rouge area. In this research, the distributions of such constituent landscape elements as construction material, height, and area of buildings are first identified. The distributions of commercial, industrial, public, and residential buildings are also demonstrated on maps. White and black residential areas are inferred through the locations of white and black schools and churches.

The resulting urban structure is characterized by a concentric zone structure with CBD on the core. Contrary to the Burgess model, however, the high rent residential zone comes closer to CBD than the low rent residential zone because white people had historically occupied the central part of the city. Black people could only live in the periphery of the urban area. The result of this study clearly indicates a strong racial factor in the urban landscape of this Southern city in the 1920s.